

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 21 日現在

機関番号：13902

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23531248

研究課題名(和文)小中学校教員と共同開発する「言語活動で表現と鑑賞を一体化させる音楽科授業プラン」

研究課題名(英文)Developing students' ability to listen to sounds and music by integrating expression and appreciation.-An attempt to improve their musical expression by preceiving and analyzing musical elements-

研究代表者

新山王 政和(MASAKAZU, SHINZANO)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10242893

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円、(間接経費) 480,000円

研究成果の概要(和文)：表現と鑑賞を一体化させる教育活動を促す効果的な方策として次の7点を確認した。

音楽構成要素が表現と鑑賞の両方へ作用することが、音楽的意味や価値を考えることへ繋がる。曲を分析的に聴く力が、感じたことや考えたことを伝える言語表現を考える力へ繋がる。自らの演奏を客観的に聴く力が、演奏表現を磨き上げる自己省察へ繋がる。聴く、考える、音を出して試す、3つの活動のバランスが重要。演奏や聴く行為そのものが創造的な活動であることを理解する。音符から音の動きを類推することも表現活動であることを理解する。音を聴く行為や頭の中で音の動きを類推する行為の全てが、鑑賞活動と結び付いていることを理解する。

研究成果の概要(英文)：The following methods were confirmed as effective ways to integrate musical expression and music appreciation:

1.Let the students be aware that music components are effective as both expression and as subjects of appreciation.It encourages students to think of musical meanings and values. 2.Acquiring the skill of analytic music listening improves students' linguistic representation of music appreciation. 3.Appreciation the difference between hearing and analytic music listening. 4.Objective listening by a student to his or her own performance, allows the necessary self-reflection to improve music expression. 5.Understanding that music activities such as performance and appreciation are creative behaviors. 6.Understanding that imagining the sound movements formed by music notation is also an expressive music activity. 7.Understanding that all music behavior such as listening to sounds and imagining sound movements,is connected to appreciation of the music.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：カリキュラム開発 授業モデル 音楽科授業研究 音楽表現活動 音楽鑑賞活動 言語活動 音楽の諸要素 学習指導要領

1. 研究開始当初の背景

小中学校の音楽科授業では歌唱と合唱を中心とした表現活動が多くを占め、研究開始当初に筆者が収集した198の実践報告中、鑑賞の実践は31件しかなく、バランスを欠く状況にあった。しかし「演奏とは聴き合わせることであり」と言われるとおり、音を出すことと聴くことは可逆的かつ不可分なものである。また他者や自己の演奏表現上の違いを聴き取れるから演奏表現が幅広く豊かになり、表現の技術や知識があるからこそ演奏上の変化を聴き取ることができる。この考え方に立脚し「聴く」ことをコアとして鑑賞と表現を一体化させた活動によって音の塊や音の羅列へ音楽的意味や感情を呼び起こす仕組みなどを思考判断し、それを再び鑑賞活動や表現活動へ還元するような授業プランを模索する必要性を感じた。

2. 研究の目的

本研究の目的は主に以下の2点であった。

第1に、現代社会において希薄になった「聴く」ことをコアに据え、鑑賞と表現が有機的に一体化した活動によって、音の塊や音の羅列に音楽的意味や価値を自分なりに付加しながら感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを思考判断し、それを言語活動によって他者との共有化・共通理解化した上で再び表現活動や鑑賞活動へ還元していくような「鑑賞と演奏を相互作用的に結び付けた授業プラン」を、愛知教育大学附属小中学校4校および筆者と係わりのある現職教員授業研究会において共同研究の形で模索し、その有効性と限界を検証すること。

第2に、実践協力を依頼している愛教大附属学校および現職教員授業研究会で開催される研究大会や現職研修会、授業研究会等において本研究に関わる授業プランや研究授業などを報告・提案することで、一般教員に対する情報提供や情報共有を行い、文部科学省学習指導要領がキーワードとして掲げる「思考・判断 共通事項に示された音や音楽を形づくる要素や仕組みを適切に用いた言語表現活動」や「学び合いや共働・共創に支えられた音楽科の授業づくり」の在り方に関する議論を促進すること。

研究の推進にあたり、筆者が考える鑑賞活動の理念について次のように説明することで研究の方向性と目的を明確にした。

「言語活動」に対する理解の不足や言葉上の教義な解釈から多く実践されているCDやDVDの演奏を聴取させて感想等を作文させる活動から脱却し、音や音楽を形づくる要素へ注目させ、感じ取って聴き取らせたものを意識化させ子ども達自身の演奏へと結び付けたり、自分達の演奏やプロ演奏家の模範演奏と比較することで気づいた演奏上の工夫を自分自身の演奏へ取り入れて活かしたりするような、鑑賞活動と表現活動を一体化し

た活動を追究することで「音楽活動と言語活動のバランス」を適切にコントロールし、「思考・判断」や「学び合い、共働・共創」に支えられた音楽科における言語活動の在り方や音楽科ならではの言語活動へ繋げていくような授業プランを模索するよう協力依頼を行った。

以上を整理すると、今回研究の目的は主に次の2点であった。

(1)「聴く」ことをコアに据え、鑑賞と表現が一体化した活動によって、音の塊や音の羅列に音楽的意味や価値を自分なりに付加しながら感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを思考判断し、それを言語活動によって他者との共有化・共通理解化へ高めるような活動を模索する。具体的には「演奏 聴く(気づく) 考える(意識化) 問題解決(自覚化) 演奏へ結び付ける」というスタイルのように鑑賞と演奏を相互作用的に融合させる授業プランを模索する。

(2)愛教大附属小中学校および現職教員授業研究会の研究大会や研修会・授業分析会などにおいて、本研究に関わる授業プランや研究授業などを報告・提案することで、一般教員に対する情報提供や情報共有を図ること。および音楽科鑑賞の授業に関する意識改革と議論の活発化を促すこと。

3. 研究の方法

本研究は主に次の方法により進めた。

(1)筆者と研究交流のある小中学校へ共同研究の形で研究実践を依頼し、研究授業を積み重ねてもらった。そこで得た成果を、授業実践者が所属する授業研究会において筆者と協議しながら整理した。なお、研究実践の協力依頼先は次のとおりである。

筆者が共同研究者を務める愛教大附属学校(名古屋小学校、名古屋中学校、岡崎小学校、岡崎中学校)

筆者が講師を務める現職教員授業研究会(稲沢市教育研究会音楽部会、西春日井地区教育研究会音楽研究部、小牧市教育研究会音楽部会、防府市中教研音楽研修部)

筆者と研究交流のある小中学校教員(豊田市立高橋中学校、春日井市立中部中学校、名古屋市立千鳥小学校)

(2)研究実践の積み重ねによって得た成果を、愛教大附属学校の研究大会および筆者が講師を務める現職教員授業研究会の研究大会において報告・提案することで、音楽科専門教員のみならず一般教員に対する情報提供や情報共有を積極的に行った。これにより鑑賞と表現を有機的に一体化した音楽科の授業づくりについて、その在り方や有効性、是非について活発な議論を促すとともに広く音楽科の授業について意識改革を図った。

研究を進める上で、今回の研究でピンポイ

ントに検証をめざした具体的な鑑賞活動のスタイルと活動の流れについて、次のように実践協力者と協議を行っている。

鏡に姿を映すように自分達の演奏を客観的に聴き比べて「気づく活動 問題点を考える活動(意識化) 問題点を解決する活動(自覚化) 演奏へ結び付けて演奏表現を磨き上げる活動(還元)」を一体化することで、「音楽の聴き方」の習得をめざす。その際に自らの演奏を映し出す「鏡」として、録音・再生が可能なスピーカー一体型のICレコーダーを各実験校へ複数台ずつ準備した。さらに拙著(「改訂版・新しい視点で音楽科授業を創る!」,スタイルノート、2011、p.138)で示した「鑑賞用評価シート」を、鑑賞と表現の両方の活動において児童・生徒同士の感想交流や意見交換で活用して貰った。

研究授業の骨格を「気づいて意識することで自ら課題を見つけ出し、違いや問題点を自覚することで自ら問題解決に取り組む活動」と設定し、その基本的な活動パターンとして次のような流れを例示した。

課題として取り上げた楽曲全体を通して、クラス全体で練習する。

課題として取り上げた楽曲の一部分を取り出してグループで練習し、録音する。

適宜、「練習 録音 再生して聴く」活動を繰り返す。

適宜、模範的な演奏の録音と聴き比べて、自分たちの演奏と何が違うか考えて自ら課題を探し出し、創意工夫や改善に向けた練習を深める。

練習前と練習後の録音を聴き比べ、自分達が設定した追究課題に対する練習の成果を話し合う。

話し合いを基にして新たな課題を探し出し、次時に向けた練習計画を考える。

なお、鑑賞は曲を記憶することから始まるため、教材には児童・生徒が慣れ親しんでいる合唱曲を取り上げた。これにより鑑賞活動と表現活動を一体化させることが可能になるため、「聞かせて終わる」劇場型の授業や一過性の活動からの脱却を図った。

研究実践の検証は、ピンポイントに次の4点に絞って進めた。

- a)子ども達自身の練習の深まりに対する「録音 再生・確認」へ取り組ませる声掛けのタイミングや方法、掛ける言葉の分析。
- b)録音 再生・確認を通じて、違いを感じ取れない子どもへのアプローチやフォロー、サポートの方法とそのタイミング。
- c)技術指導のタイミング、それを促す働き掛け方やフォロー、サポートの検証。
- d)演奏表現を深めるための教師による指導の度合い、指導方法の分析。

4. 研究成果

(1)今回の研究で確認された事項に基づいて

提案する音楽鑑賞の基本的な考え方

音楽鑑賞には思考の働き掛けが不可欠であることから、音の塊や羅列に音楽的意味や価値を付加し、感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを探り、それを感じ取ることを大切にさせる活動の有効性が確認された。そして、裏づけを伴わない漠然とした詩的・物語的な聴き方をやめさせて、音によるメッセージから様々なことを感じ取って想像させる活動が効果的であることを確認した。

さらに「質の良いあそび」によって芽生えた知覚力を手がかりとして音楽の諸要素(音色、音高、強弱、リズム、旋律、和音)に気づかせ、感じ取らせて意識化するプロセス、つまり音響現象と音楽の諸要素を結び付けてその良さや働きを自覚する「再構成」を基盤とした学習段階の有効性が確認された。

他者や自身の演奏を聴いて要素に気付き、感じ取り、意識する段階。(要素を知覚し認知する力や、要素に気づき聴き分ける力を身に付ける段階)

他者や自身の演奏を聴いたり、練習前と練習後の演奏を聴き比べたりして、その良さや働きを自覚し、それを生かしたり際立たせたりする段階。(要素を活用した鑑賞や表現を工夫する力)

要素同士の係わりや組み合わせによって生まれる効果や働き、要素の組み合わせで形づくられる音楽の仕組みを考える段階。(全体の中で要素の働きや良さを考え、包括的に捉えて再構成する力)

気付いたことや感じ取ったことを自らの演奏へ結び付けたり、言語活動・非言語活動を活用して共有・共通理解へ高めて演奏へフィードバックしたりする段階。(演奏者相互の説明力や説得力)

ここで重要なのは、音や音楽の正体や仕組みを知っていてそれを自在に使いこなせる技術を持っていなければ、より高いレベルで「音楽する」ことには繋がらない点である。つまり演奏者は自らの思いや意図を具現化するために演奏上の工夫を試行錯誤し、聴取者はその工夫や試行錯誤を読み解き演奏者の思いや意図を予想し推測する作業をしているため、より高い芸術性や情緒・情操の育成をめざす上では演奏者を育てることと鑑賞者を育てることは同義であり、両者は可逆的かつ不可分な関係にあることを、生徒へ理解させる重要さを確認した。また、音楽の要素を学ぶには、それ以前に音楽の諸要素へ充分浸らせ無意識下で音を知覚させ音へ反応させる様々な原体験や前体験が必要であることから、音楽鑑賞の活動でもこれを十分に担保する重要さを確認した。

(2)本研究で確認した事項

曲を分析的に聴く力を身に付けることは、気付いたことや感じたこと、考えたことなどを伝える言語表現力へ繋がる。

「聞く」ことと音楽を分析的に「聴く」ことを区別させ、その意識を継続させる活動が重要である。

については、自らの演奏を客観視する「音楽の鏡」を持たせることと、さらにその音楽の鏡を絶えず意識させながら模範演奏と自分達の演奏を聴き比べて演奏表現を磨き上げる自己省察を促す活動が重要である。

さらに については、「演奏」や「聴く」行為そのものが創造的な活動であることを理解させる指導が重要である。つまり音を出すことだけが表現活動ではなく、音符の並びから音の動きを予想し、頭の中で響かせた音から音楽表現の変化を感じ取ることも表現活動の一部であること、さらに出した音を聴く行為、頭の中で音を響かせながら楽譜を読み解く行為の全てが鑑賞活動と結び付いていることを理解させることが重要である。

音楽の諸要素や仕組みが表現と鑑賞の両方へ作用していることに気づかせることは、音楽の意味や価値を考えることへ繋がる。その際の活動プロセスとして次の4段階を提案したい。

[第1段階]要素に気付く・感じ取る・意識する(要素を知覚し認知する力や、要素に気づき聴き分ける力を身に付ける)

[第2段階]要素の良さや働きを自覚し、それを生かしたり際立たせたりする(要素を活用した表現や鑑賞を工夫する力)

[第3段階]要素同士の係わりや組み合わせによって生まれる効果や働き、要素の組み合わせで形づくられる音楽の仕組みを考える(全体の中で要素の働きや良さを考え、包括的に捉えて再構成する力)

[第4段階]気付いて感じたことを自らの演奏へ結び付け、言語・非言語活動を活用して共通理解へ高める段階(説明力や説得力、言い替える力や置き換える力)

(3)新たに提案する4つの活動目標

本研究の成果を受けて、新たに次のような指導を提案したい。

演奏や聴くという行為そのものが既に創造的な活動であることを児童・生徒へ理解させた上で、「鑑賞=自らの音楽的・表現的要求と照合して聴く活動」というプロセスを通じて、次の4点を身に付けさせることを鑑賞と表現を有機的に一体化させた授業の目標とするよう提案したい。

聴き方の「型」や「パターン」を知る。

作曲者の周到な作戦を推理する。

聴く力+分析する力+想像する。

制約の中で工夫された表現を推理する。

(4)新たに提案する音楽科授業における言語活動の在り方

筆者は、音楽科における学びの一つは「音楽に関する知識と音響的実体とを関連付け、体験を通してそれを実感すること」だと考えている。そして音楽科における言語活動とは、

言葉や会話、記述などを介在させた音楽に関するコミュニケーションであり、音楽の諸要素を巧く適切に組み合わせる自分の思いや意図、演奏表現などを言葉に置き換えて演奏仲間と共有化・共通理解化し、曲を聴いて感じ取り聴き取ったことを他者と話し合い比較するものであることを提案したい。さらに本研究の検証結果を受けて、これを短期間に身に付けさせるのではなく、音や音楽から聴き取ったことを体験や体感を伴って言葉と関連付けたり、感じ取ったことを言葉へ置き換えて説明したりする活動を、小中学校9年間に亘って積み上げるよう提案したい。

(5)今後に向けた課題

現実の授業の中で「現実的対応」と「計画的臨機応変」を可能にするために、今後解決すべき子どもの実態や問題点を次の4つに整理しておく。

教師からの狙いを絞った働き掛けが無いと音の塊や連なりとして聞いてしまい、音を分析的に知覚することができない子どもに対するアプローチの模索と検討。

音の融合から生じる情動や雰囲気の違いを適切な言葉と関連付ける活動を、計画的に継続する方策の検討。

子ども達だけの力で何をどのくらい気付かせて、何をどこまで解決できるのか、その可能性と限界を検証する。

子ども達の試行錯誤と教師からの適切なアドバイスが結び付くことによって、何をどのくらい気付かせて、何をどこまで解決できるのか、その可能性と限界を検証する。

教師はどのタイミングで、どのような働き掛けをするのが効果的なのか検証する。

(6)実践協力を得た授業研究会の概要

これまで本学附属学校では、独自の実践や活動を試行することを目的として研究を推進することが多かったが、今回、本研究に共同で取り組むことにより、一般校で最も取り扱いが難しいと言われている鑑賞活動に、一般校の教員と同じ目線に立って研究実践を進めた。これは「誰も知らない調味料や素材を、誰も持っていない特殊な調理道具を使って作られた特別な料理=附属でしかできない実践」からの脱却をめざすこととなった。具体的には誰でも入手可能な¥16,000-程度のポータブル IC レコーダーを、児童・生徒がグループ単位で録音・再生して自らの演奏表現を確認できるよう複数台準備し、鑑賞活動と表現活動を有機的に一体化できるのか、その可能性や限界、応用性や有効性を研究大会や研究会で報告することで情報共有・意見交換を重ねる取り組みとなった。

愛知教育大学附属名古屋小学校

愛知教育大学附属名古屋中学校

と の名古屋地区の附属小中学校では、ICレコーダーを児童・生徒がどこまで活動の中に取り込んで自発的に活用することがで

きるのか、その可能性や限界の検証に取り組んだ。

愛知教育大学附属岡崎小学校
愛知教育大学附属岡崎中学校

と の岡崎地区の附属小中学校では、「生活の中に学びがある。子ども自らが課題を発見し問題解決に取り組む」という「生活教育」をコアとして研究を推進してきた岡崎地区の附属学校では、児童・生徒が自ら課題を発見して自ら学びを構築する学習過程の中で、ICレコーダーが自らを客観視する「機会・きっかけ」としてどのくらい有効な教具・教材になり得るのかを検証した。

稲沢市教育研究会音楽部会

H25 年度愛知県小中学校音楽教育研究大会をめざして、一般校における授業実践の在り方を模索し、その応用性と有効性を検証するとともに、一般教員も加えた授業研究会で情報共有を図った。その成果は研究大会において報告された。なお研究は現在も継続中。

西春日井地区教育研究会音楽研究部

H24 年度尾張教育研究会愛日支部音楽部門研究集会をめざして、一般校における授業実践の在り方を模索し、その応用性と有効性を検証するとともに、一般教員も加えた授業研究会で情報共有を図った。その成果は研究大会において報告された。

小牧市教育研究会音楽部会

来年度開催される H27 年度尾張教育研究会愛日支部音楽部門研究集会に向けて、一般校における授業実践の在り方を模索する作業を継続し、その応用性と有効性の検証作業を進めている。併せて一般教員も加えた授業研究会で意見交換と情報共有を図っている。

防府市中教研音楽研修部

H25 年度中国四国音楽教育研究大会をめざして、一般校における授業実践の在り方を模索し、授業研究会で情報共有を図った。

豊田市立高橋中学校（蕃洋一郎）

愛教大大学院へ現職派遣院生として在籍し、本研究のテーマで修士研究へ取り組んだ。客観的に自身の演奏を振り返るモニタリングの授業への応用を模索し、勤務校の授業実践を通じて検証を進めた。

春日井市立中部中学校（長江希代子）

愛教大大学院へ現職派遣院生として在籍し、本研究のテーマで修士研究へ取り組んだ。客観的に自身の演奏を振り返るモニタリングの授業への応用を模索するとともに、生徒や卒業生へ意識調査を行ってその有効性を検証した。

名古屋市立千鳥小学校（森勢津子）

元愛教大附属学校の教員であり、本研究の期間中に共同研究者の一人として研究推進の一端を担っていた。勤務校において追実践を行うことで、一般校における応用性と有効性を検証した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕(計 17 件)

田中紀子・上田良夫・他（防府市中教研音楽研修部）、新山王政和、「日本・諸外国の舞台芸術の魅力を味わおう バレエ音楽『ボレロ』、インドネシアバリ島のガムラン、能『羽衣』歌舞伎『勸進帳』」、中国四国音楽教育研究大会発表プログラム、査読無、44、2013

大津隆・吉田奈々・滝藤友美・長橋正幸・渡邊美佳・横谷香奈子・他 31 名（稲沢市教育研究会音楽部会）、新山王政和、「あわせよう、聴きあおう、感じあおう 表現する力と鑑賞する力を高める活動を通して」、愛知県小中学校音楽教育研究大会発表プログラム、査読無、2013 年度、2013

新山王政和、「音楽的成長を導く芽 音や音楽に関する原体験の大切さ」、岡崎市小中学校現職研修委員会『岡崎の教育』、査読無、54 集、2013、p.49

井垣智恵・松本亜由子、新山王政和、「かわり合いの中で学ぶ授業の創造 言語活動を通して、聴き感じ取る力を高め表現を構築する力を育む音楽科の授業（最終年次）」、愛知教育大学附属名古屋中学校研究紀要、査読無、52 集、2013、pp.92 - 105

加藤幸子・富所妙子・野田英里子、太田理恵・服部晃峰、井垣智恵・松本亜由子、矢崎佑、新山王政和、「各附属学校教員による自主実践のまとめ」、愛知教育大学附属学校共同研究会報告書、査読無、2013 年度、2014、pp.76 - 84

新山王政和、太田理恵・小野行俊、加藤幸子・富所妙子・野田英里子、井垣智恵・松本亜由子、矢崎佑、「小中学校教員と共同開発する「言語活動で表現と鑑賞を一体化させる音楽科授業プラン」を受けて取り組んだ研究実践 2 年目のまとめ」、愛知教育大学附属学校共同研究会報告書、査読無、2012 年度、2013、pp.70 - 79

新山王政和、加藤幸子・吉松頼美、太田理恵、石川翼・井垣智恵、「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした授業実践 - 音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結びつけさせた試み - 」、愛知教育大学教育実践開発機構紀要、査読有、3 号、2013、pp.87 - 96

新山王政和、矢崎佑、「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした実践 - 音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結びつけさせた試み - 」、愛知教育大学研究報告、査読有、62 輯、2013、pp.1 - 9

丹羽裕子・小出芳子・山本由佳・他 14 名（西春日井地区教育研究会音楽研究部員）、新山王政和、「聴いて、感じて、表現する喜びを求めて 音楽の見える化と聴き比べを

取り入れた授業実践を通して」、尾張教育研究会愛日支部音楽部門研究集会発表プログラム、査読無、2012年度、2012

新山王政和、「音を出す、楽譜と向き合う、感じ取り聴き取る行為の全てが表現であり鑑賞でもある」、岡崎市小中学校現職研修委員会『岡崎の教育』、査読無、53集、2012、p.49

矢崎佑、新山王政和、「聴き合い、味わい、高め合う」、愛知教育大学附属岡崎中学校『生き方の探求 学んだことを行動につなげる』、査読無、研究のあゆみ 2、2012、pp.67 - 76

矢崎佑、新山王政和、「聴き合い、味わい、高め合う」、愛知教育大学附属岡崎中学校『生き方の探求』、査読無、研究のあゆみ 1、2012、pp.71 - 80

加藤幸子・富所妙子・野田英里子・吉松頼美・渡辺あす香、新山王政和、「自己を磨き、学び続ける子の育成」、愛知教育大学附属名古屋小学校研究紀要、査読無、51号、2012、pp.101 - 113

新山王政和、吉松頼美・加藤幸子、小野行俊・太田理恵、石川翼・井垣智恵、矢崎佑、「小中学校教員と共同開発する言語活動で表現と鑑賞を一体化させる音楽科授業プラン」、愛知教育大学附属学校共同研究会報告書、査読無、2011年度、2012、pp.83 - 93

新山王政和、「聴き取れないものは表現できないし、真の意味で楽しむこともできない - 小学校・中学校における鑑賞に関する試行、1年目のまとめ - 」、日本音楽表現学会「音楽表現学」、査読無、vol.10、2012、p.104

新山王政和、「言語活動を触媒として表現と鑑賞を活発化させる授業の模索 - 音の羅列を意味のある音の結びつきへ再構築させる試み - 」、全日本音楽教育研究会大学部会、査読無、2011年度、2012、pp.22 - 28

石川翼・井垣智恵、新山王政和、「かわり合いの中で学ぶ授業の創造 言語活動を通して、聴き感じ取る力を高め表現を構築する力を育む音楽科の授業」、愛知教育大学附属名古屋中学校研究紀要、査読無、51集、2011、pp.88 - 103

〔学会発表〕(計3件)

新山王政和、「聴き取れないものは表現できないし、真の意味で楽しむこともできない - 小学校・中学校における鑑賞に関する試行、1年目のまとめ - 」、日本音楽表現学会第10回大会、2012年6月23・24日、山梨大学

新山王政和、「言語活動を触媒として表現と鑑賞を活発化させる授業の模索 - 音の羅列を意味のある音の結びつきへ再構築させる試み - 」、全日本音楽教育研究会 H23 年度

全国大会、2011年11月17・18日、札幌市教育文化会館・札幌キラホール

新山王政和、「音の羅列から意味のある音への結びつきへの再構築」、日本音楽教育学会第42回全国大会、2011年10月22・23日、奈良教育大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

新山王 政和 (SHINZANO, Masakazu)

愛知教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10242893

(2) 研究実践に係る協力者

愛知教育大学附属名古屋小学校

(吉松頼美、加藤幸子、富所妙子、野田英里子、渡部あす香)

愛知教育大学附属名古屋中学校

(石川翼、井垣智恵、松本亜由子)

愛知教育大学附属岡崎小学校

(小野行俊、太田理恵、服部晃峰)

愛知教育大学附属岡崎中学校音 (矢崎佑)

豊田市立高橋中学校 (教諭) 蕃洋一郎

春日井市立中部中学校 (教諭) 長江希代子

名古屋市立千鳥小学校 (教頭) 森勢津子

西春日井地区教育研究会音楽研究部

(本研究に関する研究会を5回開催)

稲沢市教育研究会音楽部会

(本研究に関する研究会を8回開催)

安城市教育研究会音楽部会

(本研究に係わる研究会を6回開催)

岡崎市教育研究会音楽部会

(本研究に係わる研究会を3回開催)

小牧市教育研究会音楽部会

(本研究に関する研究会を2回開催)

防府市中学校教育研究会音楽研修部

(本研究に関する研究会を3回開催)